研究の現場から

道徳科学研究センターの研究動向

廣池千九郎と福澤諭吉（二）

道徳科学研究センター教育研究室主任研究員　江島顕一

「廣池千九郎と福澤諭吉はどのような関係にあったのか」、こうした問いについて、ここ数年研究しています。ご存知のように、両者は大分県中津市の出身であり、共に私塾を創立した人物です。しかし、両者の関係については、未だ明らかになっていないところが多いのです。

廣池千九郎（1866-1938）

福澤諭吉（1835-1901）

さて、本誌の平成二十四年七月号には、まず両者の接点について書き表しました。すなわち、廣池と福澤との間に直接の面識はなく、間接的な接点があったことを示しました。間接的な接点とは、廣池が『中津歴史』（明治二十四年）を福澤に送り、福澤がそれを受け取ったことは史料から確認ができます。また、廣池は福澤本人ではなく、福澤門下の慶應義塾関係者、その中でも中津出身者と少なからざる関係を持っていたことも分かっています（小幡篤次郎、朝吹英二、鎌田栄吉、和田豊治、本山彦一）。

次に、両者の比較研究を通じて、これまで分かったことを書き表します。例えば、廣池の最初の刊行物『新編小学修身用書』（明治二十一年）は、「実業」と「学問」を兼ね愛する人材養成を目的として編纂された道徳教育用のテキストでした。一方で、福澤の代表作『学問のすすめ』（明治十三年合本）には、文字通り近代社会における学問の必要性が説かれていますが、そこで福澤は学問を文字の読み書きそろばんといった日常生活で役立つ「実学」と捉えています（もともと『学問のすすめ』初編（明治五年）は、廣池も学んだ慶應義塾の分校ともいうべき中津市学校に学ぶ青年に向けて書かれたものでした。また、『新編小学修身用書』巻之一の第十七には「身の運動を怠るべからず」として福澤の名が挙げられています）。

また、廣池は『道徳科学の論文』（昭和三年）の中で、「真の知識は道徳と一致する」として、真の知識は必ず道徳を含み、真の道徳は必ず知識の基礎の上に立つという「知」と「徳」の関係を、「知徳一体」という言葉を用いて説明しています。

福澤のもう一つの代表作『文明論之概略』（明治八年）の第六章（全十章）は、「智徳の弁」という章題です。そこで福澤は、徳は智に依り、智は徳に依り、無智の徳義は無徳に均しいと述べ、「智」「徳」の両方が「文明」の進歩に必要であり、「有智有徳」の人を「文明」の人と呼んでいます。

以上のように、廣池と福澤は、学問や道徳といった共通の思想的課題に向き合っており、それに対する応答には関連や異同が見て取れるのです。こうした意味で、廣池と福澤についての比較研究は、近代日本における学問観や道徳思想の特質を探る比較研究に繋がるものであると考えています。

廣池千九郎と福澤諭吉の関係についての詳細は、令和元年十一月二十九日から十二月一日に廣池千九郎中津記念館で開催される「廣池千九郎研究講座」（テーマ「大分の伝統とモラロジー」）にて、筆者が報告します。